

連載

戦時下日本の国策紙芝居研究報告

戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語

—「登場人物編」その8

—近世（江戸時代）後編—

原田 広（非文字資料研究センター 研究協力者）

本稿連載「登場人物編」8回目—「近世（江戸時代）」の最終回—として、国策紙芝居に描かれた人物から宮本武蔵、大岡越前守忠相、清水次郎長、本居宣長、高山彦九郎、頼山陽、松尾芭蕉、小林一茶といった人物を取りあげる。これら近世の人物は、紙芝居に描かれた戦時下においても、そして現代においても優越的にポピュラーな人物であるが、筆者の関心はこれまでと同様、近代天皇制国家 77 年間の末期に、この人物たちが如何なる観点から選択され、どのように回顧されたのかという点にある。同時にそれは、戦時下紙芝居において主要な分野を占めていた「伝記もの」に対する創作者たちの関心を明らかにすることでもあり、筆者は、下記のような主題に共約することができるものと考え。各序数は、「近世（江戸時代）」前・中編のそれを受け継いでいる。

4. 大衆芸能（浪曲・講談もの）への親炙：宮本武蔵、大岡越前守忠相、清水次郎長
5. 近世学者・思想家のナショナリティへの賛仰：本居宣長、高山彦九郎、頼山陽
6. 近世文人の代表者（俳人）への追想：松尾芭蕉、小林一茶

以下、『国策紙芝居からみる日本の戦争』（勉誠出版、2018. 2）は『国策』と略し、その作品解説を一部引用させていただく。

4. 大衆芸能（浪曲・講談もの）への親炙

① 関連作品

●法典ヶ原の武蔵／吉川英治原作；小谷野半二繪畫、日本教育画劇、1942. 07. 20

【あらすじ】宮本武蔵が京都で吉岡一門との一乗寺での決闘後、剣の修行のために諸国を放浪するなかで下総の国法典ヶ原にたどり着いたところから話は始まる。武蔵は、そこで孤児の三澤伊織を弟子にとり、法典ヶ原の荒れ果てた姿をみて、剣を鋤に持ち替え開墾しながら、剣の道を探求することにした。武蔵と伊織は荒地の開墾と治水に取り組んだ。だが、周囲の百姓たちは毎年のように嵐があると洪水が起きる土地を開墾することは無駄な行為だと、武蔵らの行動を笑う。百姓たちの言葉通り、しばらくすると長雨が降り、武蔵らが開墾した土地は荒地となる。武蔵は、川の流れや土地の性質に抗うのではなく、川や土地の本質に従って治水と開墾を行う方法に

気づき、それを実践し成果を挙げ始める。そんなとき、村が山賊に襲撃され、武蔵がこれを撃退する。武蔵は、百姓たちに自分を護り、人を救い合う「衆の力」に目覚めるよう説く。それを受けて百姓たちは、武蔵から剣術を学び、再び襲ってきた山賊を今度は自分たちの力で撃退する。「衆の力」に目覚めた百姓らは武蔵とともに荒地の開墾を行い、やがて村は豊かになっていく。それを見届けた武蔵と伊織は、百姓たちには何も伝えずに旅立っていくのであった（『国策』 解題 p. 120／新垣）。



図1 宮本武蔵 19景

●しばられ地蔵／日本教育紙芝居協會脚本；西正世志絵画、日本教育画劇、1941. 10. 02

【あらすじ】神田旅籠町の呉服屋・大丸屋に奉公している彌太平は、白木綿 300 反を荷車に積み、業平に向かう。途中、お地蔵様の前で一休みした彌太平は、荷車がなくなっていることに気づき、大慌てで南町奉行所に駆け込む。彌太平の話を聞いた奉行の大岡越前守は一計を案じてお地蔵様を縛り付け、車に載せて奉行所まで引っ張ってゆく。何事かと群がる町人たちは車を追いかけ走り出し、役人と一緒に車を押して奉行所の門の中に入ってしまう。帰ろうとする町人たちを一喝した大岡は、3 日以内に白木綿 1 反ずつに名札を付けて奉行所まで提出するよう命じる。3 日後、集まった白木綿から、彌太平は大丸の印が入った白木綿を見つける。早速奉行所による取り調べが行われ、中之郷の勘蔵の仕業だと判明する。大岡に感謝する彌太平だが、大岡は彌太平を奉行所の一室に連れてゆく。そこにはあのお地蔵様があった。彌太平はお地蔵様に感謝し、合掌した（『国策』 解題

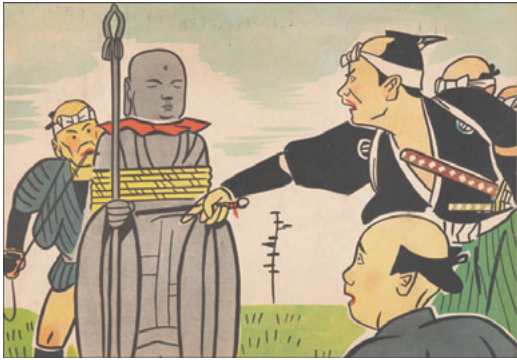


図2 しばられ地蔵 7 景

p. 51／松本)。

●虎造くづし／西正世志絵画；日本教育紙芝居協會脚本、日本教育畫劇、1941. 11. 10

【あらすじ】 清水次郎長の乾分、みる杭の彦、おかめの三吉は下っ端の三下。次郎長に呼び出され、大事な用を頼まれる。次郎長の友達である角力・滝川が、吉原の醤油屋・善助から 20 両を借りたが、善助の乾分・安に取り立てられ、抵当に化粧まわしを持っていかれた。次郎長が贈った化粧まわしを持っていかれたことを詫げる滝川に、次郎長は必ず取り返すと約束。二人に 20 両を渡し、喧嘩せずに善助から化粧まわしを返してもらってくるように頼んだ。20 両を受け取った二人は一旗揚げようと、善助の首切りを画策、吉原に向かう。そのころ、善助の乾分・安は、馴染みの店で管を巻いていた。三下から出世しようと金を取り立てたのが、かえって善助の不興を買ってしまい、化粧まわしを返しに行かねばならないことに納得がいかない様子。吉原の醤油屋に着いた彦と三吉。油断する善助を襲い、首をとる。首を持って逃げる二人。後ろから善助の乾分が追いかける。翌朝、清水港では、次郎長が乾分の大政と話している。命からがら逃げてきた彦と三吉、次郎長に坊主頭にされて今日も清水の港を歩いている（『国策』 解題 p. 61／松本）。



図3-1 虎造くづし 表紙 2

② 登場人物：宮本武蔵、大岡越前守忠相、清水次郎長

筆者は、本稿「登場人物編」の連載を開始（ニューズレター No. 44）するに当たって、戦時下紙芝居の創作と供給に深く関与した日本教育紙芝居協会が 1938 年の発足に際して、「一年に新作 100 点制作する」という自信・確信を表明していたことを紹介し、それが我が国の“ものがたり”資源への信頼とともに、伝記文学を有力資源とした紙芝居制作上の“題材選択の容易さ”に支えられていたであろうと推測した。そして、『平家物語』『将門記』『曾我物語』『義経記』『太平記』等の軍記物、『巖流島実録』『赤穂義士伝』『大岡政談』などの実録本、江戸期に様式化された「歌舞伎」「人形浄瑠璃」、さらには独演芸「講談」「義太夫」「浪花節」との相互的な影響関係」を挙げ、「これら諸ジャンルのなかに営々と伝承されてきた“ものがたり”の蓄積は、今に生きる我々と比較した場合、当時の日本人成年者にとって身体深く染みついた劇交じりの記憶であり、「歌舞伎」や「浪花節」は音曲をも総合した“国民的教養”ともいうべきものであった筈であると記した。本項「4. 大衆芸能（浪曲・講談もの）への親炙」で取り上げた近世の人物は、まさにその典型を示すものであろう。

・宮本武蔵 天正 12 年（1584 年）？-正保 2 年 5 月 19 日（1645 年 6 月 1 日）

江戸時代初期の剣術家、大名家に仕えた兵法家、芸術家としても知られる。伝説的な佐々木小次郎との巖流島での決闘や一条寺での吉岡一門との闘いなど、二刀流の使い手として、その名を知らぬ者のない人物であろう。武蔵に関わる物語は江戸時代から脚色されて歌舞伎、浄瑠璃、講談などの題材にされ、最強の青年剣士武蔵のイメージが一般に広く定着した。表題作の『法典ヶ原の武蔵』は、吉川英治が 1935 年 8 月から 1939 年 7 月まで朝日新聞で連載した新聞小説『宮本武蔵』が原作となっている。武蔵は、下総の法典ヶ原で未懇の荒野を開拓しはじめた。相手は不毛の土地であり、無情の風雨であり、自然の暴威であった。剣豪・剣聖といわれながら、求道者として民衆と共に農村開拓に挑む物語は、本センタ所蔵の紙芝居作品—川井範原作、西正世志繪畫、『大原幽學』1943. 11. 25 をも彷彿とさせる。

・大岡越前守忠相 延宝 5 年（1677 年）-宝暦元年 12 月 19 日（1752 年 2 月 3 日）

江戸時代中期の幕臣。8 代将軍・徳川吉宗の「享保の改革」を町奉行として支え、江戸の市中行政に携わったほか、奏者番・寺社奉行をも務めた。『大岡政談』や時代劇での名奉行というイメージを通じて、現代に至るまで大岡越前守または大岡越前守忠相公として知られている。『大岡政談』は、江戸の町奉行大岡越前守忠相に仮託した、実録・講談・落語・歌舞伎・浪花節など一連の作品群の総称である。話の主眼は「大岡裁き」と呼ばれた人情味のある名判決ぶりにあるが、実際には忠相とはほとんど関係のない話である。表題作『しばられ地蔵』は、江戸時代に伝来した『棠陰比事』という中国・宋時



図3-2 虎造くづし 21 景

代の裁判実話集（支那種捌き物・裁判物）の翻案とされている（大石慎三郎『大岡越前守忠相』岩波新書 1974. 4）。諸國の人情風俗や政治の善悪を知り、是非を裁断するという英雄崇拜の片影ともいべき物語が民衆的に受容されるようになり、大岡越前守は理想的名判官として民衆の間に生き続けてきた。

・清水次郎長 文政3年1月1日（1820年2月14日）-明治26（1893）年6月12日

幕末・明治の俠客、博徒、実業家。本名は山本長五郎。「次郎八の長五郎」から通称次郎長となる。養父の死後米問屋を継いだが、のち博徒となり多数の子分を従え、富士川や海上交通の縄張りを争い、勢力を張る。表題作『虎蔵くづし』は、二代目広沢虎造（1899年5月18日-1964年12月29日）が得意とした「清水次郎長伝」から「清水の三下奴（善助の首取り）」に演題を採る。1924年3月22日に売り出し中の虎造の浪曲はラジオ初放送され、「次郎長もの」が全国的にブーム化した。昭和10年から戦争をまたいで昭和30年代に至るまで、江戸っ子虎造の歯切れのよい節回しと独特の語りの組み合わせで、次郎長ものは一世を風靡した。本作品は、次郎長を主人公とするものではなく、一家のなかでも下っ端（三下奴）の二人の失敗を描き、紙芝居師を最終場面に登場させる。「仕事の中では自分を滅却し、国家のことでもお役人でも会社でも工場でもまた家でも働くときは自分の立場などと言う小さな事に拘ってはいけないのです」と自分だけの功名漁（あせ）りを指摘する戒めとなっている。

5. 近世学者・思想家のナショナリティへの賛仰

① 関連作品

●本居宣長／堀尾勉脚本；羽室邦彦絵画、日本教育画劇、1941. 11. 20

【あらすじ】元文5年7月末の夜、伊勢松坂の小津屋の主人・定利の急逝の報に涙する母・おかつと息子・富之助。富之助は当時11歳、後の本居宣長である。成長し、名を彌四郎と改めた宣長は医者への道を志す。上京した彌



図4 本居宣長 22 景

四郎は、堀元厚に医術、堀景山に学問を学ぶ。このころ、よく友達と酒を呑み、母に借金をした彌四郎であったが、母からの手紙で気を引き締め、医術の修業に専念。6年後、28歳で伊勢松坂へ帰り、医者を開業。医者として活躍する傍ら、賀茂真淵の研究に学ぶ。34歳の夏、伊勢の旅籠新上屋に真淵のもとを訪ねた宣長は、『古事記』の研究について助言を請う。真淵は研究の心構えとして、「順序正しく」「土台を作ってそこから一步一步高く登り、最後の目的に達するようにすること」を説く。その後、宣長は、35年間かけて『古事記伝』を著し、72歳で亡くなる。宣長の教えは明治維新の原動力となり、大和民族の永遠の興隆の深い土台石となっていると描かれる（『国策』解題 p. 67／松本）。

●高山彦九郎／原進脚本；西正世志繪畫；日本教育紙芝居協會製作、1942. 11. 18

【あらすじ】本作の冒頭では、高山彦九郎の人生の概略が述べられる。高山は、群馬県（上毛）の新田郡細谷の名家に生まれ、幼少から尊王の志に厚く、世の人々に皇室の尊さを説くため日本全国を旅した。高山は、18歳のときに突然実家を飛び出し、学問を修めるために京都へと旅立った。だが、京都で臣下であるはずの徳川家の居城・江戸城よりも荒れ果てた御所を目にする。それに悲憤の涙を流した高山は、天恩に報いるために全国を遊説する生活を送るようになった。しかし、そのような生



図5 高山彦九郎 4 景



活を送り始めて20年がたったころ、郷里の祖母が急病を患ったとの報せを受け帰郷する。そこで自分を育ててくれた祖母を看取り、その恩に報いるために3年の墓守を行う。しかし、その忠孝は、周囲からは理解されず、逆に怪しまれて投獄されてしまう。高山は、そこで徳川の政治には大義がないと悟り、天皇による正しい政治が行われるようになることを目指す。そこで、全国を遊説する生活に戻るが、徳川の追手が迫るなかで、高山は自分自身で「気が狂った」と語り自害する。しかし、高山の精神は、その後の明治維新につながる一粒の種となつたとされる。その功により、高山の死後、明治になってから高山は正四位の位を賜った（『国策』解題 p. 131／新垣）。

●頼山陽の母／鈴木景山脚本；西正世志絵画。1943. 05. 25

【あらすじ】幕末の尊王攘夷運動に深い影響を与えた『日本外史』の頼山陽と母・静子（雅号・梅颯ばいし）の物語。父・春水の留守を預かる母・静子は自分の父の言葉「道より外はすべらばらぼんのぼん」を守りながら病弱の山陽を育てる。山陽20歳のとき広島藩を脱藩—父からの廃嫡処分にも、母は「山陽の終生の願い」を優先させる。自宅幽閉（座敷牢）4か月にして『日本外史』の一部を完成する。父も完全成就を励まし、山陽28歳まで書き換えること5度の背後には、母の見守りがある。父の死後、妻・りえ（梨影）・子供二人（辰三・又二郎）とともに京都に迎えられた母は、脱藩の折に詠んだ歌を刻んだ一本の杖に託し「御国のために仕事を完成させよ」と山陽を励ます。山陽47歳の12月『日本外史』が完成し、翌年3度目の上京をした母の欣ぶ顔に「大臣宰相に就こうともこれ程の得意の気持ちにはなれまい」と山陽は思う（『国策』解題 p. 159／原田）。大島萬世脚本；村上巖繪畫『家』1943. 04. 25、稻庭桂子脚本；小谷野半二繪畫『櫛』1943. 04. 25とともに、文部省監修・家庭教育紙芝居第1回作品3部作を構成している（『国策』解題 p. 159／原田）。



図6 頼山陽の母 21 景

② 登場人物：本居宣長、高山彦九郎、頼山陽

歴史的人物像には時代によってイメージ・評価の転変が必然的につき纏う。近世以降だけを見ても、江戸期に儒学・国学の興廃があり、明治初期に廃仏毀釈の嵐が吹き荒れ、戦時下に皇国イデオロギーが席捲するなかで、一時期の指導者が歴史の底辺に葬られ、逆に表舞台に呼び戻され神格化されるという英雄の衰亡・再生があった。歴史的評価に振れ幅の大きい人物として、平将門、楠木正成、足利尊氏、井伊直弼、西郷隆盛らが直ちに思い浮かぶところである。ここに「5. 近世学者・思想家のナショナリティへの賛仰」として挙げた3人の人物は、300年の徳川政権のもとで育まれ明治維新を準備した尊皇攘夷思想、さらには戦時下の天皇制超国家主義へと底流する矯激な天皇崇拜、日本主義をも胚胎させた思想家である。

・本居宣長 享保15年5月7日（1730年6月21日）—享和元年9月29日（1801年11月5日）

江戸中・後期の国学者。伊勢国松坂の木綿問屋に生まれるが、家業の不振と商家に不向きな性格のため、母親の勇断で京都に医学修業する。上京中、堀景山に漢学を学ぶかわら、景山を通じて契沖の歌学にふれて開眼。やがて賀茂真淵と出会い、「古事記」研究を託される。後半生は『古事記伝』の完成に傾注し、35年かけて1798（寛政10）年に完成した。表題作『本居宣長』は、伊勢の旅籠新上屋における本居宣長と賀茂真淵の生涯ただ一度の対面「松坂の一夜」を描く。この「松坂の一夜」言説の原型は、歌人・国文学者の佐佐木信綱の『賀茂真淵と本居宣長』1917年にあるとされ、第3期国定教科書『尋常小学国語読本』1922年にも改編・収録され有名になったとされる（『国策』解題 p. 67／松本）。

中国（支那）の文化・思想（からごころ）の移入以前から存在した日本固有の精神（やまとだまし、もののあわれ）の中に「皇国」「皇統」の真理を求める宣長の『古事記』注釈は、近世における古事記研究の頂点をなし、実証主義的かつ文献学的な研究として評価されてきた。その一方で、宣長の自讃歌「敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花」は、日本文学報国会等が戦時中の翼賛運動の一環として企画・編纂した『愛国百人一首』1942年にも武士道精神を象徴する歌として選ばれた。戦争末期に多くの若者が命を散らした神風特別攻撃隊の名称「敷島隊」「大和隊」「朝日隊」「山桜隊」はこの歌からとられている。戦死を美化する散華の精神が謳歌されたこの時代、表題作『本居宣長』もまた皇国思想との結びつきと「日本（やまと）」というアイデンティティを考察した思想家という宣長の二面性を疑う余地のない場所で作られたものである。

・高山彦九郎 延享4年5月8日（1747年6月15日）—寛政5年6月28日（1793年8月4日）

江戸時代中期の尊皇思想家、警世家。「太平記」を読み、自分の先祖が新田義貞の家臣であったことに感激し、志をたてて上京。垂加流の尊王思想を学ぶ。水戸藩の藤

田幽谷とも交わり、諸国を行脚して勤王思想を提唱。幕府に行動を監視されるところとなり、家族にまで圧迫が加えられ、九州久留米で悲憤のあまり自刃した。京都の三条大橋に額づいて皇居を拝んだり、足利尊氏の墓をむち打つなど、数多くの奇行が伝えられている。林子平・蒲生君平と共に、「寛政の三奇人」の一人に数えられる。

表題作『高山彦九郎』が刊行される2年前の1940年には、五・一五事件に参加し死刑判決を受けていた三上卓によって『高山彦九郎』（平凡社）という伝記が出版されている。ここからは、1930年代の「昭和維新」を目指した人々が高山の生き方を評価していたことがわかる。奇しくも、本作品が刊行された1942年は、高山の没後150周年にあたる年であった（『国策』解題p. 131／新垣）。真珠湾攻撃の九軍神もの『軍神岩佐中佐』村田康男、鈴木景山脚本；小谷野半二繪畫1943. 06にも、主人公・岩佐直治が郷土の偉人として高山を尊奉しながら自己形成する姿が描かれている。

・頼山陽 安永9年12月27日（1781年1月21日）
-天保3年9月23日（1832年10月16日）

江戸後期の歴史家・思想家・政論家・文人。21歳で安芸広島を出奔、脱藩の罪で自宅幽閉となる。赦免ののち、京都で開塾。詩・書に才能を発揮。幽閉中に起稿した『日本外史』22巻は水戸光圀『大日本史』の普及版といわれ、松平定信に献じられた。『日本外史』とともに『日本政記』『日本楽府』で展開した史論・史観は、幕末の尊攘派の歴史意識・尊王思想の形成に多大な影響を与えた。

表題作『頼山陽の母』は、母・梅颯（ばいし）の「すべらばらぼんのぼん」（どんな逆境でも人生を謳歌する）精神で「広島藩の学者に終わらぬ」偉業に取り組む我が子を励ます姿を中心に描いた作品である。1942年5月に文部省が発表した「戦時家庭教育指導要綱」が与えた社会的影響のもと、紙芝居諸作品もまた、貞淑で勤勉で質素な美德を身につけた、慈愛深く力強い女性像を盛んに描き始める。脚本・鈴木景山の異例の2枚にわたる解説には、藤森成吉、木崎芳尚、真山青果、吉川英治の伝記を参考にし、「国民学校高学年、男女青年学校程度」を対象に「母の薫陶養護の偉大さ、家庭教育の重要」を説き「日本臣民の誇り、日本の母たる自覚」の教化を目的としたとある。作者の意図は、「皇国の後勁たる母子の繋がり」とともに、脚本や解説に明らかな「幕末の尊王精神」の想起にある。山陽の仕事は「日本臣民としての大業」であり、『日本外史』—「分りやすく読みやすく書かれた日本国民の歴史」の完成は「六百年來眠っていた日本国民の血と魂を呼び覚ます勤王運動の夜明けの鐘であった」と位置付けられている。

6. 近世文人の代表者（俳人）の追想

① 関連作品

●芭蕉／堀尾勉脚本；西正世志絵画。1941. 10. 01



図7 芭蕉 5景

【あらすじ】元禄2年3月、芭蕉45歳の春。芭蕉は門弟・曾良を連れて松島へと向かう。道すがら句を詠みながら松島へ到着した二人は、石巻、平泉を経て山形から日本海岸へ。7月、腹をいためた曾良と加賀の山中温泉で別れた芭蕉は、郷里上野に赴いた後、嵯峨で高弟去来の落柿舎に逗留し、訪ねてくる弟子とともに穏やかな日々を過ごす。秋、弟子の園女を訪ね、もてなしを受けた芭蕉は、きのこにあたり腹痛に倒れる。大阪花屋に病の床を移した芭蕉は、多くの門人に見守られながら、元禄7年10月12日に死の床につく。命を賭して正しい芸術の道を究めようとした芭蕉は、本当の芸術とは何かを示した大芸術家であったとされる（『国策』解題p. 50／松本）。

●一茶／堀尾勉脚本；西正世志絵画。日本教育画劇。1943. 01. 10

【あらすじ】主人公は江戸時代の俳人・小林一茶である。離れた故郷に住む父親の不吉な夢を見た一茶は、父のもとへ旅立った。父は病を得て年老いていたが、互いに再会を喜び合う。しかし、継母や弟の仙六は、勝手に家を飛び出して俳句にうつつをぬかし、突然帰ってきて兄貴面をするなど一茶を嫌う。やがて父は亡くなり、一茶は失意のうちに江戸へ戻った。51歳になった一茶は、弟との争いの末に亡き父の家を手に入れた。生まれて初めて田畑を持ち、妻もめとった。しかし子は早世し、妻も



図8 一茶 13景



亡くし、寂しさを癒すのは俳句だけとなった。やがて、火事で家をも失った一茶は、俳句のみで戦ってきた自分の姿を炎の中に見る。一茶は俳句を作り続け、焼け残った土蔵の中で亡くなった（『国策』 解題 p. 144／鈴木）。

② 登場人物：松尾芭蕉、小林一茶

・松尾芭蕉 寛永 21 年（正保元年）（1644 年）-元禄 7 年 10 月 12 日（1694 年 11 月 28 日）

江戸時代前期の俳諧師。連歌の第一句（発句）を文学作品として独立させ、民衆のことばを用いながらも和歌・連歌の長い伝統をいかす「蕉風」と呼ばれる俳諧を確立した。西行や宗祇ら中世詩の伝統のうえに立った芭蕉は、わび・さび・しおり・かるみ・細みなどで示される幽玄閑寂の境地をめざし、これによって俳諧は和歌・連歌にならぶ芸術性の高いものとなった。後世では俳聖として世界的にも知られる史上最高の俳諧師の一人であり、西鶴・近松とならぶ元禄ルネサンス時代を形成した文人である。

表題作『芭蕉』は、宮沢賢治の伝記研究でも知られる堀尾勉と当代エース級の紙芝居画家であった西正世志による日本紙芝居協会の比較的初期の作品である。著者クレジットのない『うづら』日本教育画劇、1941. 10 を除けば、堀尾がもっとも早くに手掛けたものになる。製作した日本教育紙芝居協会によれば、事前に「各地講習会で好評を博し」、印刷化にあたって「印刷技術に精魂を打ち込ん」だ「自信作」（日本教育紙芝居協会『教育紙芝居』4 巻 10 号、1941 年 10 月）。こうした状況下で製作された本作は、「自信作」という言葉に違ふことなく、堀尾の欄外を利用した歌に関する詳細な解説や、西の濃淡を意識した作画に製作陣のこだわりを見ることができる（『国策』 解題 p. 50／松本）。国家的な貯蓄目標のための「母さん部隊長」、廃品回収の「一握の屑」、防空演習の「空の護り」等が官庁後援で製作される一方、未開拓に等しかった幼児紙芝居の方面にも新作品が求められた。また、雑誌『教育紙芝居』の編集を担当していた堀尾においては、一時代前の街頭紙芝居から明確に飛躍していくために、紙芝居の芸術性を確保することも重要な課題となっていた。ここで構想されたのが松尾芭蕉・小林一茶そして正岡子規を主人公とする「俳諧三部作」であった。

・小林一茶 宝暦 13 年 5 月 5 日（1763 年 6 月 15 日）-文政 10 年 11 月 19 日（1828 年 1 月 5 日）

長野県の北部・北国街道柏原宿（現信濃町）の農家に生まれる。3 歳にして母を失い 8 歳の時に父が再婚、継母になじめず 15 歳で江戸に奉公に出された。奉公先を点々と変えながら、20 歳を過ぎたころには俳句の道をめざすようになる。30 歳から 36 歳まで俳句修行の旅に明け暮れ俳人と交流。39 歳のときふるさとに帰って父を看病。このときの様子は『父の終焉日』にまとめられている。この後 10 年以上にわたって継母・弟との

財産争いが続く。50 歳の冬、一茶はふるさとに帰る。借家住まいをして遺産交渉を重ね、翌年ようやく和解した。52 歳できく 28 歳を妻に迎え、三男・一女の子どもが生まれたが、いずれも幼くして亡くなり、妻きくも 37 歳の若さで亡くす。一茶は再々婚し、没後には妻やをとの間に次女が生まれた。晩年、再びふるさとに帰った一茶は間口九間の家を弟と半分に分けて住んだが、1827 年閏 6 月 1 日の大柏原宿の大半を大火により焼失し、一茶の家も類焼した。一茶は焼け残った土蔵に移り住み、11 月 19 日、65 年の生涯を閉じた。「一茶調」と呼ばれる独自の俳風を確立して松尾芭蕉、与謝蕪村と並ぶ江戸時代を代表する俳諧師の一人となった一茶であるが、その影響力は江戸期には芭蕉に比べ小さいものに留まった。明治時代中期以降、正岡子規らに注目されるようになり、その後、自然主義文学の隆盛にともなって大きな注目を集めるようになり、松尾芭蕉、与謝蕪村と並ぶ江戸時代を代表する俳人としての評価が固まっていく。堀尾勉・西正世志のコンビによる表題作『一茶』は、一茶の漂泊の生涯を描く淡々とした筆致が味わい深い作品となっている。

本稿・登場人物編「近世（江戸時代）」の最終回では、宮本武蔵、大岡越前守忠相、清水次郎長、本居宣長、高山彦九郎、頼山陽、松尾芭蕉、小林一茶といった 8 人の人物を取り上げた。冒頭に記したように、戦時下においてはもちろん、現代にいたるもときおり諸メディアに登場する人物であり、これらの作品は、誰もが知っている日本人の物語として、戦意高揚に向けた国策紙芝居と一線を画しながら、町内会の常会などで余興のプログラムの一つとして演じられた場面が想像される。

講談ものの主人公（宮本武蔵、大岡忠相、清水次郎長）は日本人が親炙した人物エピソードに物語が委ねられ、近世思想家（本居宣長、高山彦九郎、頼山陽）の物語は戦時下の皇国主義の思想的根源を再確認する手引きとなったであろう。近世文人の代表者（松尾芭蕉、小林一茶）の生涯を描いた作品は、日本文学の伝統と卓越性を追想する教養的ひとときを銃後社会に提供したであろう。他の国策紙芝居に比べれば、作品としての完成度・深みは高いレベルに達しているものの、堀尾・西による「俳諧三部作」に対する、日本教育紙芝居協会の中心人物の一人・佐木秋夫の「こんなものなんの意味があるのですか。…（中略）…。もっと戦意昂揚のものでなくてはだめだ」（『資料日本現代史月報』大月書店、1985 年 7 月）というような空気もあり（『国策』 解題 p. 50／松本）、芸術性を謳う作品の評価は分かれた。戦時下紙芝居の主要戦線は、「生産増強」「尽忠報国」「皇国の母」といった国策協力メッセージの稜線と裾野を描くことにあったからである。

以 上